令和三年十月
島根大学法文学部紀要言語文化学科編　島大言語文化　第五十一号　抜刷

訳注『風月小誌』第一号（上）

要　木　純　一

訳注『風月小誌』第一号（上）

要木純一

西南戦争が終結し、維新後の混乱がおさまった明治十年代は、日本の地方都市においても、飛躍的に出版界が発展した時代である。自由民権運動の勃興は、新聞を含めた出版事業に、混乱よりも需要をもたらした。松江においても、廃藩置県後、藩主に従って東京に移った旧藩士や知識人と連携しつつ、各種の新著が出版された。そのうちの一つが、詩歌文芸雑誌『風月小誌』（一号～三号。一号は明治十三年四月発行）である。当時の松江の漢詩壇における有力メンバーである、平賀静遠、勝田睡仙が、師である全国的に名声のあった漢学者雨森精翁に相談し、さらに中村守手ら歌人達の協力を得て、編集出版された。東京における成田柳北らによる総合文芸誌『花月新誌』の成功等に技痒を覚えたのであろう。新時代において、松江の錚々たる漢詩人の実力を全国に知らしめたいという野心もあったかと思う。

この時期の山陰文壇を論ずるのに、必須の資料であるにもかかわらず、あまり知られていないことを遺憾に思い、要木はかつて国立国会図書館所蔵のテキストを影印した（『影印風月小誌風流新誌』二〇一〇年発行非売品）。しかし、原本の劣化甚だしく、読みづらいところが多いので、翻刻を試みた（翻刻『風月小誌』二〇一〇島大言語文化二九）。今回、さらに現代語訳と注釈を加えた。漢詩、和歌、俳諧が行き着くところまで行き、しかも新しい時代に対応しようとしたその営為をより多くの人に知っていただきたい。もとより、浅学菲才、誤りが多いことであろう。ご指摘をいただければ、後日、訂正したい。

本文の部分は、一部を除いて常用漢字を用いた。便利のために、漢詩、和歌それぞれに通し番号をつけた。句読

点、返り点、評点は原文にできるだけ忠実に写したが、句読点がなくて読みにくい部分は、句読点を加えたり、分かち書きにしたりした。漢文、漢詩には、訓読書き下し文（現代仮名遣い。ふりがなを付けた）を、和文、和歌は、句読、分かち書き、現代仮名遣いによるふりがなを付け加えた。人名にふりがなを付けたのは、蛮勇のそしりを免れないが、あくまでも暫定的なものである。これも大方の指正をまって、確定していきたい。

【表紙】

明治十三年四月発行

風月小誌第壹号

風月吟社

【本文】

人間撰著。有二可レ有不レ可レ無者一。有二可レ無不レ可レ有者一。有二有亦可無亦可者一。可レ有不レ可レ無者。不レ可レ不レ為。可レ無不レ可レ有者。断々不レ可レ為。独至二有亦可無亦可者一。附二其人一而可也。」静遠睡仙二史以レ詩為レ命者也。頃編二風月小志一成。懇レ余評レ之。」所レ貴二於為レ書者。為二其有レ用也。故不レ可レ不レ為者而後始可レ為レ之。如二此冊一。雖レ非二断断不レ可レ為者之比一。要不レ過二二史自為自娯一。其不乙以二有無一為甲レ損二益於世一也固矣。殆所レ謂有亦可無亦可者已。大丈夫不レ能レ為二一世不レ可レ無之書一。屑々従二事於此一。至三乃求二人之評一。人将レ笑二其多事一也。」雖レ然。人貴二自知一。吾人在レ世。亦非二有亦可無亦可者一乎。以二有亦可無亦可之人一。為二有亦可無亦可之書一。於レ理無二不可者一。況自為自娯。為与レ不レ為。其権皆在レ我。於レ人何関焉。則人之所三笑以為二多事一者。我多見二其多事可一レ笑也。因評而還レ之。併書以為レ引。十三年花朝老雨居士引

【訓読】人間の撰著は、有る可くして無かる可らざる者有り。無かる可くして有る可からざる者有り。有るも亦た可無きも亦た可なる者有り。有る可くして無かる可からざる者は、為さざる可からず。無かる可くして有る可からざる

者は、断々として為す可からず。独り有るも亦た可無きも亦た可なる者に至りては、其の人に附して可也。」静遠、睡仙二史は詩を以て命と為す者也。頃ろ風月小志を編みて成る。余に懇めて之を評せしむ。」書を為すに貴ぶ所の者は、其の用有るが為也。故に為さざるべからざる者にして而る後に始めて之を為す可し。此の冊の如きは、断断として為すべからざる者の比に非ずと雖も、要は二史自ら為し自ら娯しむに過ぎず。其の有無を以て世に損益を為さざる也固よりなり。殆ど謂わ所る有るも亦た可、無きも亦た可なる者なる已。大丈夫一世無かる可からざるの書を為す能わず、屑々として此に従事す。乃ち人の評を求むるに至りては、人将に其の多事を笑わんとする也。」然りと雖も、人は自ら知るを貴ぶ。吾人世に在るも、亦た有るも亦た可無かるも亦た可なる者に非ず乎。有るも亦た可無きも亦た可の人を以て、有るも亦た可無きも亦た可の書を為すは、理に於いて不可無き者なり。況んや自ら為して自ら娯しみ、為すと為さざると、其の権は皆我に在り、人に於いて何ぞ関せん。則ち人の笑いて以て多事と為す所の者は、我多く其の多事の笑う可きを見る也。因りて評して之を還し、併せて書して以て引と為す。

十三年花朝、老雨居士序。

【大意】この世界の書物には、存在すべきで、なくてはならないものがある。ない方がよくて、存在すべきでないものがある。あってもよく、なくてもよいものがある。存在すべきで、なくてはならない本は、出版しなくてはいけない。ない方がよくて、存在すべきでない本は、絶対に出版してはならない。ただ、あってもよく、なくてもよい本は、その作者がどういう人であるかに応じて出版してもよかろう。

文学者平賀静遠、勝田睡仙の二人は、詩作にいのちを賭ける人たちだが、先月、『風月小誌』を編集し終わって、私に批評の前書きを求めに来た。

本の出版に於いて重要なことは、それが世の役に立つということである。だから出版せぬわけにはゆかないという状況になってはじめて出版がゆるされるものである。この『風月小誌』のごときは、絶対に出版してはならないような本の類いではないが、とどのつまりは平田勝田両人が勝手に編集して勝手に楽しんでいるだけのこと。出版されようがされまいが、この世に、益もなければ害もない類いであることはもちろんである。まあおそらくは「あってもよ

く、なくてもよい」ものに分類されるにすぎまい。立派な人間なのに、この世になくてはならない本を出版できず、こんなつまらぬことに精を出し、さらに私に所収作品の批評をたのむといってくるとは、よけいなことをするやつだと人にいわれることであろう。

とはいえ、人はみずからが何者であるかをしることが大切だ。我々が、この世にいるのも、「あってもなくてもよい」ものではないか。「あってもなくてもよい」人が、「あってもなくてもよい」書物を出版するというのも、理屈の上で通らぬわけでもあるまい。まして、勝手に出版して、勝手に楽しむわけだから、出版するしないを決める権利はすべてじぶんたちにだけあり、人にはなんら関わりのないことだ。すると、「つまらぬ余計なことを」、という連中の方こそ、つまらぬ余計な口出しをしていることになると私は思う。こういうわけで、批評をして返し、さらに前文（引）もあわせて書くことにした。　明治十三年　花朝（旧暦二月十五日）に。老雨居士。

【注釈】人間―「にんげん」ではなく、人の住む現実社会。　可有不可無―老子「有る可からず、無かる可からず」等のペダントリックな言い回しのパロディか。「可」は、「できる（可能）」、してもよい（許可）」、文脈によっては「すべきだ（当為）」等ニュアンスに幅があるが、老雨はそれらをうまく料理してこの文章を書いているようだ。一義的に訳さざるを得なかったので、その辺の面白さは十分に伝えられない。　断々―断乎に同じ。絶対に。　二史―「史」は歴史官が本義だが、ひろく文章家を指すようになった。　静遠―平賀静遠。名は信順、字は君昌、松江藩の大夫。詩を雨森精翁・釈苔洲に学ぶ。明治十六・七年の交没す。年七十ばかり（横山耐雪編『出雲詩綜』の詩人小伝による。山口大学一九九二年アジアの歴史と文化一号所収の故入谷仙介博士訳注を参考にし、適宜省改した。以下同様）。　睡仙―名は紹興、字は君幹、松江の世臣、家はすこぶる富む。佐川玄玄・平賀楽之・林原蕉窓・永井桐陰・高木中原・中山石選・生田晩樵等と社を結びて唱和す（『出雲詩綜』小伝）。　屑々―こせこせするさま。小事にこだわるさま。欧陽脩・石曼卿墓表「世俗の屑屑たるを視ること、其の意を動かすに足る者無し」。　多事―余計なこと。しなくてもよいこと。　人貴自知―成語。慣用句。老子「自ら知る者は明らかなり」。　花朝―もと花の美しい春の一日をいったが、後に旧暦二月十五日を指すようになった。田汝成・熙朝楽事「二月十五日花朝節と為す」。明

治十三年ならば、新暦三月二十五日、発行日の前月となる。　老雨居士―雨森精翁。名は謙、字は君恭、また精斎・鷺山・老雨等の号有り。松江の人。初め田村寧我を師とし、のち小竹・東畝に従う。また茗黌に入りて一斎・艮斎諸家の称許する所となる。国学の教授に任ぜられ、藩侯及び世子の師傅を兼ぬ。維新ののち、日御崎の宮司に補され、広島県の大属に任ぜられ、厳島の宮司を兼ぬ。晩年、湖西の平田に卜居し、家塾を開きて亦楽舎という。明治十五年（一八八二）没す。年六十一なり（『出雲詩綜』小伝）。

風月小志の緒言

古今和歌集の序に、花になく鶯、水にすむかはつの声をきけは、いきとしいけるもの、いつれか歌をよまさりける と、見えたり。況や人たらむもの、豈おもひ無からむや。其思をのへ心をやるは、歌とから歌にあり。これの風月小志は、其意を得て、取集めたる也けり。そもく、花鳥風月は、文人学士の常に愛翫るものなり。まことや、古へ人のいひけんやうに、遠き所も出たつあしもとよりはしまりて、年月をわたり、高き山も麓の塵ひちよりなりて、あま雲たなひくまておひのほるとかや。此小志も、平賀、勝田、村上三氏の手になれりといへとも、末つひに谷水の大海に入るか如く、大志の基本ならさらめやと、感けおもふまにく、そのよし一くたり端つかたにかいつくるになんありける。

明治十三年三月。宿の名におふ花もよひするころ。　朱桜岡のあるし守手しるす。

【大意】風月小志（小誌）の緒言。古今和歌集の序に、「花咲く中で鳴くうぐいす、水の中にいる蛙の声を聞くと、どんな生物でもみな歌を詠む（ことがわかる）」、と書いてある。まして人間は心でいろいろ思うものだから、なおさらである。その思いを表す手段として、和歌と漢詩がある。この風月小志（小誌）はそのことを理解した上で、たくさんの作品を集めたのである。そもそも花鳥風月の自然は、文人達が常に楽しむもの。なるほど、昔の人がいったように、「遠い旅も、出発する足下から始まって、長い年月歩み続けるものだし、高い山も麓にある泥土が積もって出来たもので、雲がたなびくほどに成長した姿だ」というのはもっともである。この小志（小誌）も平賀、勝田、村上

（正雄）の三氏によって編集された微々たる一冊まさに小志（小さなこころざし）であるが、やがて谷水が最後は大海に注ぎ込むように、大志を達成する基礎とならぬとも限るまい。大変に感心して、この本の由来を一段ほど、端書きとして書かせていただいたわけだ。　明治十三年三月　私の家の呼び名（ははか）をもった花が咲こうとする季節に。　ははかおかのあるじ　中村守手が記した。

【注釈】古今和歌集の序―紀貫之撰。いわゆる仮名序。　ミヤビヲ―優雅で、風流を好む男。万葉集「遊士（みやびを）と吾れは聞けるを屋戸貸さず吾れを帰せりおその風流士（みやびを）」。　遠き所も―以下、おひのぼる、まで、これも『古今和歌集』序の文章。　出立つ―出立。旅に出発すること。　おひのほる―草木などが生長して丈が高くなる。源氏物語・蓬生「しげき蓬は、軒をあらそひておひのぼる」。　かいつくる―かきつくるのイ音便。徒然草序「そこはかとなくかきつくれば」。　塵ひち―ちりと土。万葉集「知里比治（チリヒヂ）の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ」。　小志―小誌の意を、わざと小さな志の意にとって、後の「大志」と対比した。　かいつくる―書き付ける。「かきつくる」のイ音便。徒然草序「そこはかとなくかきつくれば」。　花もよひ―もよふ（催ふ）は、その状態になろうとする様子。桜などの花が咲きそうな気配。開花のきざし。　村上―正雄。村上琴舎。名は正雄、松江の人、和歌を善くす。明治三十九年（一九〇六）没す。年八十一なり（『出雲詩綜』小伝）。剪淞吟社初代社長村上琴屋の父。漢詩より、和歌に秀でて、「風月小誌」も和歌の方のとりまとめを担当したのであろう。　感け―心がそれにとられるのをいう。心が動く。感心する。共感する。書紀・皇極三年正月（岩崎本訓）「中臣鎌子連、便ち遇（めく）まるるに感（カマケ）て、舎人に語りて曰はく」。　名におふ―名にふさわしい実体をになっていること。実体を伴った名を持つこと。　ははか―古事記・天岩屋戸「天香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天香山の天波波迦（あめのははか）を取りて、占合（うらない）まかなはしめて」。カニワザクラあるいはウワミズザクラの古名という。守手の専門である、国学、易学関係の重要事項であり、守手の家にこの花が植えられていたので、号としたのであろう。なお、守手の別号、甲文丘、鼎山も上文の占合に関係があるのかも知れない。　中村守手―一八二〇―一八八二　幕末-明治時代の国学者。文政三年二月十二日生まれ。中村守臣（もりおみ）の養子となり、国学や和歌

をまなんだ。明治二年出雲大社から松江藩にまねかれ藩校修道館教授となった。のち熊野神社宮司。易学、軍学にも通じる。明治十五年死去。六十三歳。本姓は永井。通称は富得、文太夫、三千雄。号は西涯、甲文丘（かめおか）、鼎山。著作に「歌之心得」など。（講談社『日本人名大辞典』）

風月小誌第一号

1 偶題　　老雨居士

皇統三千歳。天威五大洲。文明魯英佛。無二此古金甌一。

【訓読】皇統三千歳、天威五大洲。文明なる魯英佛も、此の古金甌無し。

【大意】天皇の血筋が三千年日本を治め、その威勢は五大陸にふるわれるほどである。文明国家をなのるロシア、イギリス、フランスもこれほどの長い時間に耐えた鉄壁の守りは持っておるまい。

【注釈】偶題―たまたま思いついて書き付けた詩。　老雨居士―雨森精翁。序の注を見よ。　金甌―金甌無缺。少しのきずもない黄金製の瓶のように、国家が強固で、外国の侵略を一度も受けていないことのたとえ。南史・朱异伝「我が国家は、猶お金甌の一傷缺無きが若し」。

2 山中秋夕　　釈苔洲

汲水奚童去未レ還。独吹二爐火一暮雲間。一声鳴鹿不レ知レ処。寒翠依微孕レ月山。

【訓読】汲水の奚童去りて未だ還らず、独り爐火を吹く暮雲の間。一声の鳴鹿処を知らず、寒翠依微たり月を孕む山。

【大意】水をくみに行った下男が出かけてまだ帰ってこぬ。しかたなく、暮れ方の雲が周りを覆う中、ひとりで囲炉裏の火を噴く。鹿が一声鳴いたが、どこからだろうか。寒々とした山の緑がぼんやりとかすかにみえ、月がいまにもその山の端から出そうになって、あたかも山が月をはらんでいるかのようである。

【注釈】釈苔洲―河野苔洲。名は天麟、字は縦望、また笠津・石窓・三蕉の別号有り。松江永泉寺の主なり。初め田村寧我の門に入り、のち、釈雲華に従う。晩年、家塾を立てて淡成舎と称す。明治二十四年没す。年八十五なり。『淡成舎遺稿』若干巻有り（『出雲詩綜』小伝）。この詩は『淡成舎遺稿』に所載。　奚童―こどもの召使い。奚は奴隷の意。　寒翠―冬なお落葉せぬ常緑樹。范雲・園橘「芳条寒翠を結ぶ」。　依微―ぼんやりしてはっきりしない様。謝霊運・江妃賦「清管の依微たるを奏す」。　孕月―中国では、真珠や卵が月光を吸収して成長する意で用いる場合が多い。和風の奇抜な表現。

雨森老雨云。澹雅清遠。近人詩冊中。所絶無而廑有。名下無虚士。

【訓読】雨森老雨云う。澹雅清遠。近人の詩冊中に、絶えて無くして廑かに有る所。名下に虚士無し。

【大意】雨森老雨評。あっさりとしていながら高邁である。こんな作品は、近頃の人の詩集中には、ほとんど無きに等しい。苔洲師が、名声があるのは、決して嘘ではないことが分かる。

【注釈】澹雅―淡泊で高雅なこと。任昉・王文憲集序「沉鬱澹雅の思い」。　清遠―清潔で俗世から遠く離れた高邁な境地。陶淵明・飲酒其四「厲響清遠を思う」。　廑―僅の仮借。わずかに、やっと。漢書・賈誼伝「其の次に廑かに舎人を得たり」。顔師古注に「廑は僅と同じ」。　名下無虚士―虚名ではなく実力があること。名実ともに備わっていること。陳書・姚察伝「名下に定めて虚士無し」。

3 謾成　勉斎学人

不レ願公侯位。不レ願将相官。願レ之亦何益。此生但迂慢。薄田五六頃。好書三百篇。母妻不レ説レ饑。児子不レ啼レ寒。如レ此則足耳。悠然天地寛。

【訓読】願わず公侯の位、願わず将相の官。之を願うも亦た何の益かあらん、此の生は但だ迂慢たらんのみ。薄田五六頃、好書三百篇。母妻饑えを説かず、児子寒きを啼かず。此くの如くんば則ち足る耳、悠然として天地寛し。

【大意】王侯貴族の位もいらないし、大将大臣の役職にもなりたくない。だって、ほしがったって何の役にも立たな

いじゃないか、自分の人生はただくそ真面目で傲慢なままで終わることにしよう。五六頃の実入りの少ない田んぼに、良書三百篇。母も妻も腹が減ったと言わず、こどもも寒くて泣くことがない。そんぐらいで十分じゃないか、天地はゆったりと広い、こんな自分をきっと受け容れてくれるであろう。

【注釈】謾成―漫成に同じ。ふとできあがった作品（といいながら、政治批判や不満を吐露する場合が多い）。　勉斎―山村勉齋。名は良行、字は聞伯、良顕の孫、塩谷宕陰・大沼枕山に就きて業を受け、また山田方谷と交わる。広瀬の藩学教授たり。明治四十年（一九〇七）米子の寓居に卒す。年七十二なり。著に『四書五経磨鏡録』その他数種あり（『出雲詩綜』小伝）。　迂慢―迂遠で傲慢。理想論を述べる儒者タイプ。新唐書・韋陟伝「会ま杜甫房琯を論ずるに、詞意迂慢たり」。　薄田―貧しくて痩せた土地。三国志・蜀志・諸葛亮伝「薄田十五頃」。　頃―面積の単位。五六十アール。　天地寛―孟郊・崔純亮に贈る「門を出づれば即ち碍げ有り、誰か天地寛しと謂う」。

大沼枕山云。瀟灑勁直。詩如二其人一。其人今之古人也。豈不二欽想一哉。○老雨云。安レ分之語。有二撃壌遺響一。

【訓読】大沼枕山云う。瀟灑勁直。詩は其の人の如し。其の人は今の古人也。豈に欽しんで想わざらん哉。○老雨云う。分に安んずるの語。撃壌の遺響有り。

【大意】大沼枕山評。さっぱりとしてしゃれた中に、剛直さがある。作品は、作者がそのまま反映しており、その作者は現代におけるいにしえ人のように立派である。尊敬の念を深くせぬ訳にはいかぬ。○雨森老雨評。自らの運命境遇に満足しているさまがうかがえる作品。鼓腹撃壌歌の境地を受け継ぐ詩である。

【注釈】大沼枕山―一八一八～一八九一。江戸後期から明治初期の漢詩人。幕臣大沼竹渓の子。江戸で梁川星巌の玉池吟社に参加。嘉永二年下谷(したや)吟社をひらき、明治にかけての漢詩壇の中心となった。名は厚。字は子寿。通称は捨吉。別号に台嶺。著作に「房山集」「江戸名勝詩」など（講談社『日本人名大辞典』）。　瀟灑―瀟洒。俗っぽくなくしゃれているさま。　勁直―剛直。強くてまっすぐな様。　欽想―思慕する、その人となりを慕う。韓愈・渝州の李使君に答うる書「欽んで為す処を想えば、益す深く勤企す」。　安分―自己の本分を守り、真面目に生きること。白居易・拙を詠む「此を以て自ら分に安んじ、窮すると雖も毎に欣欣たり」。　撃壌―堯の時、老

人が太平を謳歌して、土を打って拍子を取りながら歌ったという歌。「日出て作し、日入りて息う、井を鑿ちて飲み、田を耕して食う、帝力何ぞ我においてあらんや」（曾先之『十八史略』）。　遺響―昔の文学作品の風格が、後世に受け継がれること。

4 咏史　笠山　中村氏　出雲広瀬人

郡県良図國勢張。焚レ書不三復法二先王一。腐儒休レ掉雷同舌。千古英雄秦始皇。

【訓読】郡県良図國勢張る、書を焚き復た先王に法らず。腐儒掉うを休めよ雷同の舌、千古英雄秦始皇。

【大意】郡県制中央集権の素晴らしい政策により、国力はいよいよ発展し、焚書坑儒によって、周王朝の政策を完全否定した。腐れ儒者ども、付和雷同の議論をするな。空前絶後、永遠の英雄だぞ、秦の始皇帝は。

【注釈】咏史―西晋の文学者左思は、咏（詠）史八首を作った。過去の歴史を詠むことに借りて、不遇な己の鬱屈を晴らし、政治社会批判を暗に行った。ここでも、表向きは、始皇帝を詠みながら、廃藩置県等の明治新政を意識する。　笠山―中村笠山。名は彝。広瀬の人。文政五年生る。年六十餘にして没す（『出雲詩綜』小伝）。　郡県―始皇帝は中国統一後、三十六郡を設け、その下に県を置き、皇帝任命の官吏を派遣した。明治政府の廃藩置県、中央集権、官僚制の強化等の新政策を意識する。　焚書―焚書坑儒。反政府的な書を燃やし、儒者を坑（穴）に生き埋めにするという秦始皇帝の思想弾圧事件とされるもの。ここでは、その評価を逆転して、旧弊排除の側面に日を当てる。明治初期の廃仏毀釈、国家神道化を意識するか。　先王―古代の帝王。儒者の尊崇する堯舜、周文王、武王を指す。ここは、天皇軽視の幕藩体制を暗に指すとみてよいであろう。　腐儒―史記・黥布列伝「天下の為に安んぞ腐儒を用いん」。役立たずの議論をしてばかりいる学者。不平士族や自由民権運動のイデオローグを指すか。　掉舌―弁舌を弄すること。史記・淮陰侯列伝「軾に伏して三寸之舌を掉う」。　雷同―雷が鳴ると万物がそれに応じて響くことより、他人の言動にむやみに同調すること。ここはおそらく新政反対の党派を作ることをいう。礼記・曲礼「勦説する毋れ、雷同する毋れ」。　千古―おおむかし。さらに、遠い昔から現在にいたるまでの長い間。そして、未来永劫を

も言うようになった。宋之問（一説に王昌齢）・駕長安を出づ「聖徳千古を超ゆ」。

老雨云。慧眼如レ炬。咏レ史者不レ可レ如レ此邪。

【訓読】老雨云う。慧眼炬の如し。史を咏む者此くの如くす可からず邪。

【大意】智慧に満ちた眼力で、暗闇にたいまつをてらしたように、真実を見抜いている。歴史を材料として詩を作るものはこのようでなくてよいものか。

【注釈】慧眼―本来は仏教語。仏の持つ神通力のうち、一切が空であると見通す智慧の目。慧眼の士のように仏教的空観と関係なく、一般に真実を見抜く力として用いる。　如炬―「慧眼如炬」「如炬慧眼」で成語。

5 午睡　　錦霞荘主　勝田氏　名紹興　字君幹　出雲松江人

甘夢誰呼覚。半窓日未レ西。落花忽成レ雨。中有二一禽啼一。

甘夢誰か呼びて覚ます、半窓日未だ西ならず。落花忽ち雨と成り、中に一禽の啼く有り。

【訓読】甘美な夢を見ていたのに、誰が呼び起こしたのか。窓の半分を照らしている太陽はまだ西に沈むには時間がある。散った花が、急に雨のようになって、その中で一羽の鳥が鳴いている（お前のせいで目が覚めたのか）

【注釈】錦霞荘主―勝田睡仙。名は紹興、字は君幹、松江の世臣、家はすこぶる富む。佐川玄玄・平賀楽之・林原蕉窓・永井桐陰・高木中原・中山石選・生田晩樵等と社を結びて唱和す（『出雲詩綜』小伝）。大きな別荘で、しばしば詩宴を開いたことが、当時の山陰新聞に見える。　甘夢―詩語としてはあまり用いないようである。和風の表現か。

誰呼覚―蘇軾・朱光庭の初夏に次韻す「陶然一枕誰か呼覚す」。　半窓日未西―韓愈・城南に遊ぶ十六首其八同遊に贈る「喚起窓全て曙なり、催帰日未だ西ならず。無心なり花裏の鳥、更に与に情を尽くして啼く」。他の部分もこの詩を意識するようである。　一禽啼―禽は鳥と同じ。平仄の関係で用いた。李白・春日酔いより起きて志を言う「一鳥花間に鳴く」を意識するであろう。

老雨云。天籟自然。極二淡遠之致一。

【訓読】老雨云う。天籟の自然。淡遠の致きを極む。

【大意】雨森老雨評。天が与えたような美しい自然な詩律。淡くてしかも高遠な趣の極致を描写する。

【注釈】天籟自然―本来は自然界の風の音等を笛の音にたとえた（荘子・斉物論）。後に、詩歌が自然の調子にかない、すぐれていること。詩文の絶妙なことをいう。　淡遠―恬淡として無欲で高遠な詩境。　致―心を赴かせること。興致。

6 歩月　拳斎　服部氏　名膺　字子高　出雲松江人

爽気吹レ空月色清。満庭無二処不一虫声一。苔間濃露明千点。触レ屐纖珠掉又生。

【訓読】爽気空を吹いて月色清らかなり、満庭処として虫声ならざるは無し。苔間の濃露明らかなること千点、屐に触るれば纖珠掉い又生ず。

【大意】さわやかな秋の風は空を吹き渡っている中、月が清らかに照っている。庭中どこもかしこも虫の鳴き声。こけのそこここに濃いつゆがかかり、あかるく輝いている。下駄がふれると、小さな真珠の玉のように、はらりと落ちては、また次の露があらわれる。

【注釈】歩月―月の照る中で散歩すること。夜、物思いにふける場合が多い。杜甫・別れを恨む「家を思い月に歩んで清宵に立つ」。　拳斎―服部拳斎。一八五三～一九一一。教育者。名は膺。字は士善。初めの名は兵彌。号は拳斉又は撫瓢、迂史。備中松山藩士・渡辺貞介の二男。服部犀渓の養子となる。有終館で山田方谷に学ぶ。明治十一年ごろ上京し二松学舎で学び、後各地の中学校の教諭となる。著書に、『漢文規範』二十巻（『高梁市史』、『漢文学者要覧』）。この詩は、東京で寄稿されたものか。　出雲松江人―不審。備中松山人の間違いか。　無処庭不虫声―善住・西斎秋夜に同じ句がある。

枕山云。巧密膩腴。鎔錬備致。

【訓読】枕山云う。巧密膩腴。鎔錬備さに致す。

【大意】大沼枕山評。細かで濃密な描写。表現の鍛錬が隅々まで行き届いている。

【注釈】巧密―巧みで精密である。趙蕃・青田の劉令同年茶を寄するに答え見るる之作に和す「鴻漸烹煎応に巧密なるべし」。　膩腴―本来は料理が脂っこいことだが、ここでは、レトリックが詰め込まれてこってりとした滋味があることをいうであろう。高斯得・北澗禅師留別に次韻す「清寒腴膩を滌ぐ」。　熔錬―金属をとかして鍛錬精製すること。ひいて、レトリックを極めること。劉禹錫・両如何詩、裴令公の贈別に謝す二首其二「終に期す大冶再び熔錬するを」。

7寄二壁間布袋一（壁間の布袋に寄す）蘭窓主人　阪本氏　名世敬　字士直　出雲松江人

純朴自存太古風。多年分レ榻此相同。便々汝腹蔵二何物一。味在二笑而不レ答中一。

純朴自ら存す太古の風。多年榻を分かつも此に相い同にす。便々たる汝が腹何者をか蔵する。味は「笑いて答えざる」中に在り。

【大意】（壁に掛けてある布袋の絵について詩を作る）朴訥で飾り気のない姿は太古の風気を伝えている。長い間、お別れしていたが、ここでまた一緒に寝ることになるとは。パンパンに膨れたお前のおなかには何が入っているんだい。笑って答えないその姿にこそ、この絵の味わいがある。

【注釈】壁間―間は、あたり程度の意。壁上と同じ。　布袋―本来は唐末五代の奇僧契此のこと。常に頭陀袋を背負っていたことから布袋という俗称がつけられた。弥勒の化身とされる。図像では太鼓腹の姿で描かれる。日本に入って、七福神の一人としてあがめられ、絵や像が盛んに造られた。ここは絵か。　蘭窓―坂本蘭窓。名は世敬、字は士直、また耕雲と号す。松江の人、世子の侍講たり。また監軍をもって征長・秋田の諸役に従う。晩年、家塾を開きて、学半舎という。男の有隣は越後の新発田に移住す。明治四十三年（一九一〇）没す。年七十三なり（『出雲詩綜』小伝）。　純朴―本来は加工を加えない木材。後に飾り気のない朴訥な人柄を指すようになった。葛洪・抱朴子・明本「曩古は純朴にして、巧偽未だ萌えず」。　太古風―古代の飾り気のない気風を指す。白居易・旅して華州に次

す袁右丞に贈る「愛す此の一郡人、太古の風を見るが如きを」。　分榻―榻は簡易ベッド。分榻は同榻而臥（同じ寝台で寝るほど仲がよい）に対していうのであろう。しばらくしまっておいた布袋図を、居間に掛けたのだろうか。相同―同榻の略。　便々―おなかが膨れた様。歴代肥満体の故事は多いが、ここは安禄山の故事を意識しているだろう。旧唐書・安禄山伝「帝（玄宗）は其の腹を視て曰く、胡は腹中何をか有して而して大なる」、答えて曰く「唯だ赤心耳」。　笑而不答―李白・山中問答「笑って答えず心自ずから閑なり」。

老雨云。善戯謔。○山村勉斎云。惟其無レ所レ蔵。以レ故便々。

【訓読】老雨云う。善く戯謔す。○山村勉斎云う。惟だ其の蔵する所無きのみ。故を以て便々たり。

【大意】雨森老雨評。うまいギャグだ。○山村勉斎評。その腹に何も隠していないからこそ、ぱんぱんなんだよ。

【注釈】戯謔―からかう。詩経・衛風・淇奥「善く戯謔す兮、虐と為さず兮」。　以故便便―布袋の腹の中には、「空」が詰まっているという洒落であろう。

8 紙鳶　三板居士　清水氏　周防熊毛郡人

揚々得々奏二何功一。不レ遇虚鳴驚二碧翁一。憐汝生涯托二危殆一。夕陽影裏一絲風。

【訓読】揚々得々として何の功をか奏する、遇わずして虚しく鳴り碧翁を驚かす。憐れむ汝の生涯危殆に托するを、夕陽影裏一絲の風。

【大意】凧よ、得意満面で飛んでいるが、お前がどんな功績をあげたといっているのか。うまいチャンスにめぐり会えず無駄に大口を叩いて空の神様を驚かす。かわいそうにお前は一生を危険な賭にたくしているのよのう。夕日の光の中、わずかに一本の糸につながれて、風の流れにただよっている。

【注釈】紙鳶―凧のこと。元稹・鳥有り二十章其七「鳥有り鳥有り群の紙鳶」。　三板居士―清水三板。太郎と称す。山口県の人。明治十一年（一八七八）島根県書記官たり（『出雲詩綜』小伝）。居士は世俗の仏教信者。　揚々―意気揚々たる様。得意げな様。柳宗元・伏神を辨ずる文「君子之を食べ兮、其の楽しみは揚揚」。　得々―気持ちに任せ

て満足する様。何遜・西州直し、同員に示す「得得心神に任す」。碧翁―空の神様。天公。陶谷・清異録・天文「(晋の出帝は)天を詠む詩に曰く、高平なる上監碧翁翁」。一絲風―一筋の糸ほどのかすかな風の意だが、ここでは、凧の糸を風に任せていることを表現しようとしているのであろう。

老雨云。諷刺之意。自見二結句一更妙。人人不二自覚一。可レ憫。

【訓読】老雨云う。諷刺の意、自ら結句に見ゆるは、更に妙なり。人人自ら覚らず。憫れむ可し。

【大意】雨森老雨評。風刺の気持ちが、自然と結句に表れていて、ますます絶妙である。どんな人も、自分がこんな風であることに気がつかないんだな。本当にかわいそうだ。

9 山荘春晩　　鱸汀　鈴江氏　出雲松江人

日永無三人叩二竹扃一。落花不レ播寂二門庭一。有レ誰愛惜春光老。葉底一声鶯語青。

【訓読】日永くして人の竹扃を叩く無し、落花播かれず門庭寂たり。誰か有りて愛惜せん春光の老ゆるを、葉底一声鶯語青し。

【大意】春の日永、我が家の竹の扉を叩いて訪ねに来る人もなく、散った花も広がっていないので前庭もひっそりとして寂しい。春が老いて去ってゆくのを誰が愛おしむことであろうか。花の散った新緑の葉の下で、鶯が一声鳴く、その声が青く染まっていく。

【注釈】鱸汀―不明。鈴江泰造(一八四八～一九〇六)か。出雲国飯石郡飯石村生まれ。村長、県会議員に挙げられ、一八九四、第4回衆議院議員総選挙で島根県第二区より選ばれて衆議院議員となる。地方殖産、特に養蚕業、茶業の作興に尽瘁する(衆議院事務局編『衆議院議員略歴第一回乃至第十九回』)。子の鈴江言一は、社会運動家、中国革命史家として著名。　門庭―門の向かいの空き地、庭。または、その付近一帯。易・節「門庭を出でざるは凶」。

春光老―春が去って行くこと(擬人化)。岑参・綿州李司馬秩満ちて帰京するを送り、因りて李兵部に呈す「眼看春光老ゆ」。

老雨云。楊万里詩。杏花林裏犬声紅。結句所レ本。○勉斎云。温柔詩教也。使二多少世間佶屈語者流愧死一。

【訓読】老雨云う。楊万里の詩「杏花の林裏犬声紅なり」は、結句の本づく所なり。○勉斎云う。温柔たる詩教也。多少の世間の佶屈語者流をして愧死せ使めん。

【大意】雨森老雨評。楊万里の詩の「杏子の花の林の中で、吠える犬の声が赤色に染まっているかのようだ」という句が、第四句が本にしたところであろう。○山村勉斎評　詩による人々に対する穏やかな教化といえよう。どれほどたくさんの世間のごちゃごちゃした小難しげな詩を作る連中を恥ずかしい思いにさせることか。

【注釈】楊万里―一一二七～一二〇六。南宋の詩人。南宋四大家の一人で、奇抜な発想、俗語の多用が特徴。　杏花林裏犬声紅―この句は楊万里の集に見当たらなかった。老雨の勘違いか。楊万里の作として収める選集の類いがあるのか。いずれにせよ、まわりの風景の色の影響によって、聴覚であるはずの動物の声に色覚を感ずる共感覚的な趣向を表現した奇抜な句である。　温柔詩教―本来は詩経による、おだやかな人間を育てるおだやかな文化教育を指す。礼記・経解「孔子曰く、其の国に入れば、其の教えは知る可き也。其の人と為り也、温柔敦厚なるは、詩教也」。後に一般の詩の教育効果をさすようになった。　佶屈―章や字句が堅苦しくてわかりにくいこと。韓愈・進学解「周誥、殷盤は、佶屈聱牙たり」。

10 美甘投宿　　蕉窓　太田氏　名義和　字公利　出雲松江人

酒醒転怯客衣単。孤枕蕭々夢未レ安。月黒前渓魑魅語。満山雨気冒レ窓寒。

【訓読】酒醒め転た怯ゆ客衣の単なるを、孤枕蕭々として夢未だ安からず。月は黒し前渓魑魅の語、満山の雨気窓を冒して寒し。

【大意】前夜に飲んだ酒も醒めて、旅人である私の服は一重で薄いのでゾクゾクッとするようになる。ひとりぼっちで枕に臥していると、寂しさが身にしみて、安らかな夢を見ることができない。前の方の谷に暗い月がかかっていて妖怪がなにかしゃべっている。山いっぱいに満ちた雨の気配、それが窓を突き抜けて入ってくるので、寒くてたまら

ない。

【注釈】美甘―現岡山県真庭市。旧津山藩。いわゆる出雲街道（姫路から松江）の中間点に位置する宿場。山中の難所である。　焦窓―太田蕉窓（詩一首）名は義和、字は公利、通称は春造、松江の人、十六島の村長なり（『出雲詩綜』小伝）。

河野苔洲云。奇峭。

【大意】奇抜で他にない鋭い観察だ。

【注釈】奇峭―山のそびえ立つさまより、文学に俗気がなく、個性が際立つ様。

11次二小竹先生山静帖韻一（小竹先生の山静帖の韻に次す）原十首　適処山人　儀満氏　出雲平田人

矮屋草茅壊。衡門薜蘿古。唯縁三遠二市城一。自覚恢二胸宇一。隠者半求レ名。清流誰踊レ武。読レ書夜未レ眠。坐聴催レ花雨。

【訓読】矮屋草茅壊れ、衡門薜蘿古びたり。唯だ市城に遠ざかるに縁って、自ら覚ゆ胸宇を恢いにするを。隠者も半ばは名を求む、清流誰か武を踊がん。書を読んで夜未だ眠らざるに、坐ろに聴く花を催す雨。

【大意】小さな我が家の藁葺き屋根はボロボロになり、冠木門にかかるつたかずらは長い年月を経ていることをうかがわせる。まちから遠いこの地に住むことによってわが胸の内は広々としているように感じる。隠者を自称しているやつも、半分は名利に未練たっぷりな中、昔からの清らかな生き方の流れを誰がひきついでいくのであろう（私ぐらいであろうか）。夜も読書して眠らないでいると、花よ咲け咲けとせき立てる雨がふる。それをじっと聞いている。

【注釈】小竹―篠崎小竹。一七八一～一八五一。江戸時代後期の儒者、漢詩人、書家。大阪の人。頼山陽と交友があった（講談社『日本人名大辞典』）。　山静帖―小竹が文政七年五月に多田温泉を訪れた際に、『鶴林玉露』所載の宋人唐小西の七律首聯「山は静かにして太古に似たり。日は長くして小年の如し…」の十字のそれぞれを韻字として、五言律詩十編を詠み、行書でしたためた。それが法帖として流通した（未見）。この五律は、「多田温泉に浴す」

と題されて、『小竹齋詩集』巻三に収められている。「古」字韻の作は以下の通り。「奕々源家祖、廟祀往古を観る。群山地形に随い、喬木天宇に逼る。王室政に網無く、将軍世よ武を好む。寧ぞ知らん裔孫に至りて、民庶膏雨に浴せんとは」。韻字の、古、宇、武、雨を、儀満適処は、この順番どおりに用いている（次韻。第一句末の祖は用いず）。

原十首―小竹の十首に次韻したが、そのうちの一首のみ選んだ。　適処―儀満適処。通称は泰造、平田の人、詩を雨森精翁に学び、大坂に住す（『出雲詩綜』小伝）。　踵武―踵はつぐ、ついてゆく。武は歩武、足跡。前人の営為を継承する。楚辞・離騒「前王の武を踵ぐに及ぶ」。　催花―春雨。花が咲くようにせき立てる雨。

老雨云。律而帯二古調一者。第五句。蓋有レ所レ感而発。仕官捷逕。今古同嘆。○又云。結句婉麗。

【訓読】老雨云う。律にして古調を帯ぶる者。第五句は、蓋し感ずる所有りて発するならん。仕官の捷逕。今古同じく嘆ず。○又云う。結句は婉麗たり。

【大意】雨森老雨評。近体詩の律詩であるが、古体詩のリズムをそなえている作品。第五句は、おそらく、ふだん感じていることがあって、表に出てきたのであろう。隠者ぶることが、官職につく早道であるのは、今も昔も同様、嘆かわしいことである。○さらに評する。最後の句は明るくて柔らかな調子がよろしい。

【注釈】律而帯古調者―この詩は近体詩の規則から外れた上声韻である。　仕官捷逕―隠者のふりをするのが仕官への早道であるということ。旧唐書・盧蔵用伝によると、終南山に隠棲した盧蔵用は、その名声を利用して仕官しようともくろんでいた。それに対して司馬承偵は「僕を以て之を視れば、仕宦の捷径なる耳」と揶揄した。南山捷径ともいう。　今古同嘆―陳造・再次韻「此の嘆きは今古同じ」。　婉麗―女性や自然の柔美な様。後に文学表現に対して用いられることが多くなった。楊炫之・洛陽伽藍記「林泉婉丽」。

12　新潟竹枝　　淞雨散人　松田氏　名敏　字舜卿　出雲松江人

北風怒巻海門潮。不レ見商船来駐橈。多少楼台都鎖レ雪。月寒七十二紅橋。

【訓読】北風怒りて巻く海門の潮、見ず商船の来りて橈を駐むるを。多少の楼台都て雪に鎖さる、月は寒し七十二

紅橋。

【大意】北風が怒り狂ったように信濃川河口付近の海潮を巻き上げている。停泊している貿易船は一つも見えない。どれほど多くの妓楼が一つ残らず雪に覆い被さられていることか。月が寒々と七十二あるという新潟市街の赤い橋を照らしている。

【注釈】淞雨散人―松田淞雨。名は敏、字は訥卿、松江の人。弘化二年生まる。雨森精翁・沢野含斎に従学し、詩を苔洲・枕山・松塘・黄石に学び、吉岡星秋と並称さる。大原郡長たり。遷りて浜田・横浜の典獄に転ず。晩年東京に住し、文墨をもってみずから娯しむ（『出雲詩綜』小伝）。大正十二年没。著書『再域遊草』大正四年、馬庭義雄編刊は大正二年、中国旅行の詩を集めたもの（入谷注）。散人は、世間無用の人。文人が雅号の下に添えて用いる。

海門―河口。大河が海に注ぐあたり。　商船―新潟は、江戸時代は北前船でにぎわい、更に日米修好通商条約により、開港され、外国との貿易も盛んになった。従って妓楼も。　駐橈―橈はかい。引いて船全体を指す。劉禹錫・竹枝「江頭の蜀客蘭橈駐む」。　多少楼台―杜牧・江南春「多少の楼台煙雨の中」。ただし、彼は寺院、此は妓楼。

七十二紅橋―新潟は、堀や水路が発達し、たくさんの橋が町に架かっていることで著名。頼三樹三郎が新潟を訪れたときの詩に「柳梢の眉月夜微茫、江は渠流に入って曲々に通ず。八百八楼涼水に似たり、簾を掀ぐれば七十二橋の風」とあるのが典故らしいが、それ以前から七十二橋と呼ばれていたのかも知れない。杜牧・揚州韓綽判官に寄す「二十四橋明月夜」を意識する。

鱸松塘云。余亦作二此題絶句二十首一。然不レ得二如レ此豪爽一。慚愧慚愧。

【訓読】鱸松塘云う。余も亦た此の題の絶句二十首を作る。然れども此くの如く豪爽たるを得ず。慚愧慚愧。

【大意】鱸松塘評。私も新潟竹枝という題の絶句を二十首作ったが、このように壮大な作品にはとても及ばない。恥ずかしい限りである。

【注釈】鱸松塘―一八二四～一八九八。幕末明治時代の漢詩人。江戸にでて、梁川星巌にまなぶ。慶応元年江戸浅草に私塾（のち七曲吟社）をひらいた。安房出身。本姓は鈴木。名は元邦。字は彦之。別号に東洋釣史、十髯叟

堂。著作に「松塘詩鈔」「房山楼詩」など（講談社『日本人名大辞典』）。　絶句―鱸松塘「新潟竹枝」と題して、『花月新誌』（第二十一号・二十七号）に載る。そのなかには「秋生七十二紅橋」の句もあり。

13 題画　　西山重常　出雲神門郡人

霜月下二篷窓一。漁翁迷二所処一。長江一笛風。吹乱蘆花絮。

【訓読】霜月篷窓に下る、漁翁は所処に迷う。長江一笛の風、吹きて乱す蘆花の絮。

【大意】霜の降る中凍てついた月がとま舟のまどを下っていき、暗闇の中、老いた漁師は、自分がどこにいるか分からなくなってしまう。大河に、笛の響くような一陣の風、アシのわたをあちこちに吹き飛ばしていく。

【注釈】題画―絵に書いた詩のことであるが、どのような絵か不明。まさにこの詩で詠まれた風景なのであろう。西山重常―西山荻村。名は重常、字は士常、関一郎と称す。川津村の人、伊藤宜堂・広瀬林外に従学す。また神戸洋学館に英学を修め、松江病院長に任ぜらる。のち衆議院議員たり。明治三十五年（一九〇二）没す。年五十五なり（『出雲詩綜』小伝）。　迷所処―迷処所が普通。盧照鄰・東山谷口を過ぐ「桃源処所に迷う」。　一笛風―杜牧・宣州開元寺水閣に題す「落日楼台一笛の風」。

老雨云。日田遺響。

【訓読】老雨云う。日田の遺響。

【大意】雨森老雨評。日田咸宜園広瀬淡窓や広瀬林外の詩風を受け継いだ作だ。

【注釈】日田―豊後日田の私塾咸宜園のこと。広瀬淡窓や林外が主催した。幕末、松江藩からもここに学びにくる人が多かった。重常がかつてそこで学んだことを意識する評。　遺響―広瀬淡窓らの詩風のことと思われるが、どのようなものかよく分からない。あるいは、絵が日田の自然をしのばせるということか。

14 仝　　**春流逸人　高橋氏　出雲松江人**

桃桜争発白交レ紅。片々篩来乱二晩風一。花際春流清且浅。遊人掲渉錦波中。

桃桜争いて発き白紅を交え、片々篩い来って晩風に乱る。花際の春流清く且つ浅し、遊人掲渉す錦波の中。

【大意】（前首の絵に同じく題す）桃と桜が争って花開き、白色に赤色が混じっている。花びらひとひらひとひらが、夕方の風に乱れ飛んで、まるで箕で米をふるっているかのよう、花のそばの、春の小川、その流れは、清らかで浅くサラサラと。はなびらで錦のようにそまっている波を、旅人は服のあしもとをからげて、渡っていく。

【注釈】春流―高橋春流。松江の人、英学を善くし、渡辺洪基とともに学ぶ。晩年詩酒に逃れ、作る所はなはだ多し。今はすでに散失せり（『出雲詩綜』小伝）。なお、渡辺洪基一八四八～一九〇一、越前の人、慶應義塾に学ぶ。帝国大学初代総長、貴族院議員（講談社『日本人名大辞典』）。　花際―「際」はものともの接するところ。花と花の間。劉希夷・公子行「花際裴回す双の蛺蝶」。　春流―自分の号を織り込んだ。　掲渉―衣服を上に引っ張って、川を徒渡りする。李白・瑩禅師房にて山海図を観る「掲渉す滄洲の畔」。

苔洲云。合作。不レ恥二古人一。○編者云。際作レ底如何。

【訓読】苔洲云う。合作。古人に恥じず。○編者云う。際を底に作るは、如何。

【大意】河野苔洲評。よく出来た作品だ。古人に勝るとも劣らない。○編者（平賀静遠？）案。あいだの意の「際」を、したの意の「底」に変えるのはどうでしょうか。

【注釈】合作―よくできた作品。書画詩文が規範に合っていること。謝赫・古画品録・陸杲「時に合作有り、往往にして人に出づ」。　際作底―底は下の意。花と花の際では、地上を流れる川が空間を流れるようなので、変えた方がいいということか。岑参・終南東渓中の作「渓水は草よりも碧にして、潺潺として花底に流る」。

15 書懐　　静所　平賀氏　名勝　字公明　松江人　住上野前橋

胆気雖レ豪奈二此貧一。弊衣陋室僅容レ身。幸然猶有二友朋顧一。畢竟天公不レ殺レ人。

【訓読】胆気豪なりと雖も此の貧を奈かんせん、弊衣陋室僅かに身を容る。幸然として猶お友朋の顧みる有り、畢竟天公は人を殺さず。

【大意】肝っ玉だけは座っていると思うのだが、この貧しい暮らしはどうしようもない。ボロボロの服、狭い部屋でやっと自分の体を囲っている次第。幸い、まだ友達が気に掛けてくれる。お天道様は人を死ぬまでは追い込まないというのはなるほどそうだ。

【注釈】書懐―かねがね思っていることを述べる。　静所―平賀静所、通称は勝三郎、静遠の弟（『出雲詩綜』小伝）。上野前橋―現群馬県前橋市。　弊衣―ボロボロの服。賈誼・新書・属遠「彊めて弊衣を提荷して至る」。　陋室―粗末な部屋。劉禹錫・陋室銘「斯は是れ陋室なるも、惟れ吾が徳は馨る」。　僅容身―王安石・陳和叔に呈す「車を毀ちて屋と為し僅かに身を容る」。　幸然―「幸」を二文字に伸ばした言い方。俗語的。

老雨云。斯人而至レ斯乎。紅顔薄命。古今同嘆。

【訓読】老雨云う。斯の人にして斯に至れる乎。紅顔薄命は、古今同じく嘆ず。

【大意】雨森老雨評。このような優れた人でも、こんな窮境に陥るのか。立派な若者が運命に恵まれていないのは、昔から今に至るまで、人々が嘆くところである。

【注釈】斯人而至斯乎―論語・雍也「命なるかな。斯の人にして而も斯の疾有あるや」。孔子が、業病にかかった弟子の悲運を嘆くことばを利用している。　紅顔薄命―美人薄命と同じく、本来は女性に対して用いる語であるが、ここは若者に対していう。紅は、青年の血気盛んな様をいうのであろう。

〔付記〕本稿は、
科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号19K00296
近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（期間二〇一九～二〇二一年度研究代表者　要木純一）

及び、
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究共同プロジェクト　近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（課題番号一九一三　期間二〇一九～二〇二一年度　研究代表者要木純一）
及び、
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究プロジェクト　山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト（課題番号　一九〇二　期　間：二〇一九～二〇二一年度　研究代表者　野本瑠美のち田中則雄）
による成果の一部である。